

論

コロナ禍にあって、過去の感染症との戦いの歴史を辿る

久留米大学
学長直属特命教授（医療政策担当）

佐藤敏信氏

壇

1 はじめに

原稿執筆の時点で、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の収束に向けての道りは楽観できる状況にない。今般のコロナ禍の中で、過去の感染症との戦いの歴史を思い出して、少し辿ってみることにした。

もうずいぶん昔のことも思えるが、わが国におけるコロナの最初の事例は、2020年2月3日に横浜港に到着したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の10名の患者であった。この報道は、筆者に中世イタリアの船舶の検疫を思い起こさせた。検疫の語源である quarantine は、イタリア語のヴェネツィア方言 quarantena および quaranta giorni（40日間の意）が語源であって、オリエントからの船を40日間接岸させず、港外に停泊させてペストその他の感染症の侵入を防いだことに由来しているからである。

社会的にそうであるから、文芸作品にも様々な影響が及んでおり、有名なところではジョヴァンニ・ボッカッチョのデカメロン（Decameron）があげられる。タイトルはギリシャ語の「10日」（deka hemerai）に由来し、十日物語と和訳されることもある。1348年に大流行したペストから逃れるためフィレンツェ郊外に引きこもった男3人、女7人の10人が退屈しのぎの話をするという趣向で、10人が10話ずつ語り、全100話からなっている。パズリーニの監督で1971年に公開されたイタリア映画を覚えておられる方もあろう。

シェイクスピアのロミオとジュリエットもそうだ。初演は1595年頃とされているが、話自体はその100年以上前のことと推測されている。修道士のジョンがロミオに重要な手紙を届ける使命を帯びるのだが、途中の村でペストに出くわし、戸口を封印

され、外出することができなくなる。当時のイギリスのペスト対策によれば、感染者が住んでいた家は最低6週間は板で囲われ、家族や召使いは、感染のあるなしにかかわらず家の中に閉じ込め、しかも外に出ないように見張りを立てることになっていたという。修道士からの伝言がロミオに伝わらなかったことが2人の死につながる。ここでもペストとその対策が重要なポイントになっている。

こうしてみると、今般のロックダウンや「自粛」が目新しいものではなく、先人たちの知恵であることがわかる。

2 太宰府から始まった天平の疫病大流行

さて、筆者の属する久留米大学の周囲にも、過去に今回以上の大混乱があったという記録がある。その最大のものは天平の疫病大流行（天平7～9年・735～737）だろう。久留米から博多（福岡市）へ向かう途中、そのやや博多寄りに太宰府がある。筆者は小学生時代の一時期、その官衙である都府楼（写真1）の近くに住んでいた。古代の大陸や半島との往来の玄関口であり、しばしば感染症流行の入り口ともなっていたようだ。



【写真1】都府楼跡（福岡県太宰府市）

続日本紀（しょくにほんぎ）の記録から、その発端は遣唐使か遣新羅使を通じて豌豆瘡（わんずかさ / えんとうそう） = 痘瘡が持ち込まれたものと想像されている。そもそも天平 6 年（734）には畿内で地震が発生、7 年も凶作だったという。そのような民衆の困窮の最中に大流行が始まったのである。

続日本紀の該当部分、傍線部（図 1）を現代文に直す。天平 7 年（735）8 月「十二日、聖武天皇が『大宰府の管内に疫病による死者が多いと聞く。救助・治療して、人民の命を救いたいと思う』と仰せになった。そこで、幣を大宰府管内の神祇に奉り、人民のために祈祷させた。また、太宰府の大寺（= 観音世寺・写真 2）と管内諸国の寺院に、金剛般若経を読ませた。そして、使者を遣わして病人に食糧を施し与え、併せて湯薬を施した。（中略）。また、「太宰府管内の諸国では疫瘡が大流行し、百姓（筆者注・ひやくせい、律令国家の下では農民ではなく、広く民衆を指す）がことごとく臥せてしまった。だから、今年の間、貢調（物税）を停めて欲しい。そこで聖武天皇はその要請を許した。」と。この流行は太宰府管内にとどまらず、近隣に、さらには平城京へも伝播した。天平 9 年になると政権を担っていた藤原 4 兄弟が死亡するなど多くの貴族に感染し、政治的、社会的に大混乱をもたらしたという。

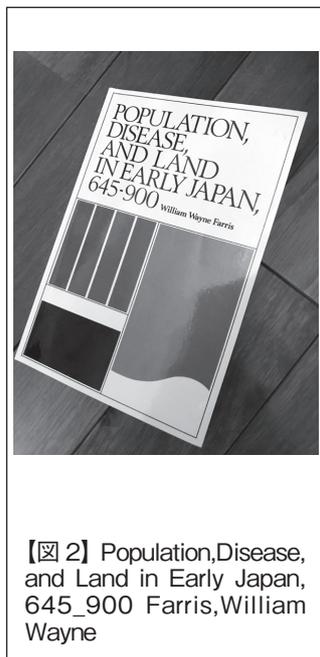
興味深いのは、日本の古代史研究家の Farris の著書（図 2）の中に、当時既に疫病のモニタリング制度が導入されており、国内で疫病が発生した際には朝廷への報告が行われるよう公式令（くしきりょう）で定められていた（図 3）とあることだ。

また、この流行が社会に及ぼしたインパクトについては死亡率から知ることができるという。どうやって死亡率を知るかという点正倉院文書として残っている正税帳（しょうぜいちょう）を見ればいいのだそうだ。正税帳は、当時の公文書であって、諸国の収支決算書のことであるが、その豊富な情報量から当時の財政状況だけでなく、地方の状況に至るまで具体的に知ることができるという。この正税帳の中の公出挙（くすいこ、稲の貸し付け）には、死亡等によって返済できなかった人数が記載されており、これに基づけば、天平 9 年には全国で 100 ~ 150 万人が死亡したことになるといえる。当時の日本全体の人口が 450 万人ということだから、実に全人口の 1/3 が死んでいることになる。冒頭に述べた中世ヨーロッパのペスト蔓延で、人口の 1/3 が死亡したと言われているから、同程度のインパクトであったと言えよう。

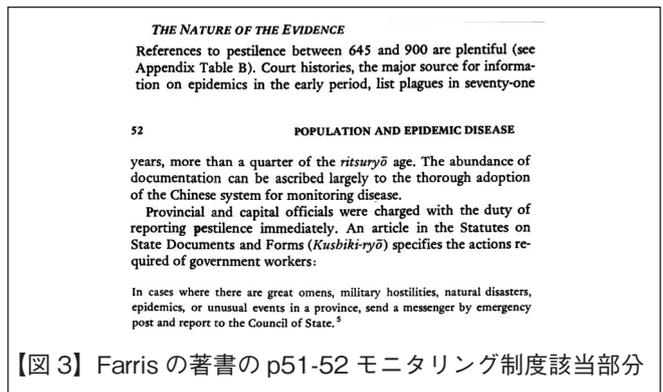
こうした未曾有の事態に、聖武天皇は、行政組織の簡素化を図り、同時に荒廃した土地の再開発を目指して天平 15 年（743）、墾田永年私財法を發布した。法の施行は公の土地という大前提を覆すものであり、律令体制崩壊の兆候として捉えられることも多いが、当時のこうした荒廃した状況に鑑みれば、社会復興としての意義もあったのだろう。聖武天皇は同時にこの災厄が自分の不心得によるものではないかと責任を感じ、仏教への帰依信仰を深め、天平



【図 1】 続日本紀：国立国会図書館デジタルコレクション 国史大系第二巻



【図 2】 Population, Disease, and Land in Early Japan, 645_900 Farris, William Wayne



【図 3】 Farris の著書の p51-52 モニタリング制度該当部分



【写真 2】 府の大寺（観世音寺）

19年（747）には東大寺の大仏の鑄造が始まった。さらには日本各地に国分寺を建立させた。

これほどの猛威を振るったのだが、多くの人民が感染し、集団免疫のような状態になって、いったんは収束したようだ。

それにしても、中世ヨーロッパのペスト蔓延の700年も前の出来事が、十分に評価に耐える丁寧な記録として残されていることに驚く。そして、今般のコロナ禍の始まり、伝播の状況、拡大、そして社会の混乱から政治への影響まで、いろいろと通じるところがあり、きわめて興味深い。

3 日本で最初の予防接種・種痘

時代はずっと下るが、久留米出身の緒方春朔による種痘についても紹介しておきたい。緒方春朔は、寛延元年（1748）久留米藩士小田村甚吾（初名瓦林清右衛門）の二男として久留米に生まれ、久留米藩医緒方元斉の養子となった。その後、長崎に遊学し、寛政元年（1789）には久留米の北東20kmにある黒田家の分藩である秋月藩8代藩主長舒に召し抱えられた。春朔は清の医学書「御纂醫宗金鑑」（乾隆7年・1742刊）を読んで中国式人痘法を研究し、ほぼ実施のメドは立っていたが、対象者に困っていた。すると、これを聞いた大庄屋天野甚左衛門が自ら進んで自分の2児を実験台に使うよう申し出たという。そこで春朔は寛政2年（1790）2月14日にこの2児に早苗法にて実施し成功した。実際に春朔が行ったものは、痘の痂皮を乾いたまますり潰して鼻に吹き込む早苗法を改良し、鼻孔の前に「へら」にのせた早苗を吸い込む方法だったという。その後、秋月藩の同僚医師たちの理解と協力を得て、種痘は町民に少しずつ広がっていったという。ジェンナーの牛痘に先立つこと6年である。春朔は、種痘成功後、自分

の秘伝とすることなく、種痘を広め、種痘という概念を医師のみならず庶民にも理解させるため、寛成5年（1793）「種痘必順辨」を和文で著した。さらに、寛成8年（1796）には、「種痘緊轄」ならびに「種痘證治録」を著してその普及に努めた。筆者はかつて観光で秋月（朝倉市）を訪れた際に、たまたま緒方春朔の碑や説明文（写真3、4）を見つけてこのことを知り、大いに驚いた。

一方、久留米の西北西30kmにある佐賀藩でも、弘化3年（1846）、天然痘が大流行した。そうした中で、佐賀藩医・楢林宗建の依頼を受けた長崎・出島のオランダ商館医のドイツ人、オットー・ゴットリーブ・モーニッケが、バタビアから痘苗（牛痘）を取り寄せた。宗建はこの痘苗を用いて嘉永2年（1849）6月に、オランダ商館で自分の子供、建三郎に種痘を受けさせ成功した。ジェンナーの世界初の牛痘接種に遅れること53年、これが日本で初めての種痘の成功であった。

この報告を聞いた10代藩主の鍋島直正は、宗建の指導を受けた侍医の大石良英に命じて同年8月、佐賀城内で息子の淳一郎（直大）にも接種させたという。その後、良英は安政5年（1858）に好生館（もと医学寮）の教導方、万延元年（1860）に教導方頭取に就任した。筆者は、たまたまご挨拶に伺った佐賀県医療センター好生館において、このときの種痘の模様を描いた絵（図4）を拝見し、桐野高明理事長（元国立病院機構理事長・元東京大学副学長）にご解説いただいた。

この成功によって種痘は佐賀藩内に広がり、10月には佐賀藩江戸藩邸の伊東玄朴に送られた痘苗から、関東・東北の各地にも広がることになる。この伊東玄朴は、佐賀県神埼市にて出生し、佐賀藩士・伊東家の養子となったのち、長崎の鳴滝塾で、フリッパ・フランツ・フォン・シーボルトよりオラン



【写真3】緒方春朔の予防接種碑（秋月城跡）



【写真4】緒方春朔の業績を述べた碑

ダ医学を学ぶ。文政9年（1826年）オランダ商館長の江戸参府にシーボルトが随行する際、一緒に江戸へ向かい、そのまま江戸に留まり、佐賀藩医の身分で蘭学の同志と交流していたのである。

こうして種痘が全国に広まる過程で、西日本の中心となったのは、緒方洪庵である。洪庵は、漢方医全盛の時代、文政5年（1822）のコレラの大流行にあってなすすべのない漢方に限界を感じ、蘭学を志したという。天保7年（1836）に長崎へ留学、同9年（1838）に大坂瓦町に蘭学塾「適塾」を開く。榎林宗健の成功から5か月後の嘉永2年（1849）11月には、大和屋喜兵衛の出資で古手町に「除痘館」を設立し（写真5）、民間による無償の社会奉仕として種痘を始め、11年後の万延元年（1860）には適塾の南に移り、18年後には官営となった。

一方、江戸では、安政5年（1858）、伊藤玄朴や大槻俊斎ら江戸の蘭学者たちが資金を出し合ってお玉ヶ池種痘所（千代田区岩本町2丁目7-11）を設立した。その痕跡は今は石碑と銘文（写真6）のみ知ることができる。半年後には焼失し、下谷和泉橋通り（現・神田和泉町、津藩藤堂家の上屋敷、伊東玄朴邸）に移ったからである。1862年には緒方洪庵も招聘され、普及に尽力したという。その後、これが西洋医学所、大学東校を経て東大医学部へと繋がっていく。

明治に入ると9年（1876）には内務省第16号の「天然痘予防規則」によって、「初生70日から満1才までの小児は必ず種痘すべし」と定められた。伝染病予防法の制定が明治30年（1897）であるから、天

然痘対策こそが伝染病・感染症対策の始まりと言えよう。いずれにしても、こうして振り返ってみると日本の近代医学は、種痘から始まったとさえ言える。

4 終わりに

さらに下って最近のことでは天然痘根絶があげられよう。その立役者の一人は、筆者にとって厚生省（現厚生労働省）の医系技官の大先輩であり、実際にご指導もいただいた蟻田功先生（元国立熊本病院長）である。昭和37年（1962）厚生省の課長補佐だった蟻田先生がこのプロジェクトに取り組むきっかけはWHOの専門家募集であり、これに応じ、西アフリカのリベリアに降り立ったのだが、そこからは苦闘の連続だったという。1977年、ソマリアにおける患者発生を最後に世界中から天然痘は消え去り、その後2年間の監視期間を経て、1980年5月、WHOは天然痘の世界根絶宣言を行った。その後も現在までに患者の発生はない。

ここまで書いてきた一連の話は、今般のコロナ禍の中でワクチンの開発を期待して待つ、今のわれわれの心にも響くものがあるのではないだろうか。

いったんは克服したかに見えた感染症だが、依然として侮れないということだ。こうした過去の経緯や経験は時折復習して、将来に備えなければならない。

※図4の淳一郎君種痘之図は、佐賀県立好生館より転載許可をいただいた。それ以外の建物、碑等の写真は筆者撮影。



【図4】 閑叟公於御前世嗣子淳一郎君種痘之図



【写真5】 除痘館発祥の地の碑



【写真6】 お玉が池種痘所跡

施設紹介

医科大学が果たす役割・使命は、医療の中核的病院としての地域社会の要請、医療技術の進歩等に伴い、社会的重要性は一層高まりつつある。なかでも、高度医療機関かつ医育機関として、充実した機能を備えた大学施設等が、新時代を担うものとして強く望まれている。本誌では、新・増築された協会加盟各大学施設を順次紹介している。

順天堂大学

教育研究・歴史ファサード館（7号館）の竣工



教育研究・歴史ファサード館（7号館）外観

『順天堂創立175周年記念事業』として15年に渡り「順天堂大学キャンパス・ホスピタル再編事業」に取り組んでまいりましたが、本事業の締めくくりとなる教育研究・歴史ファサード館（新研究棟：7号館）が2020年9月に竣工致しました。

新研究棟は、教育・研究・医療各分野を通じて国際レベルで社会貢献できる人材の育成を目標に、基礎・臨床研究の領域を越え、国内外学者間の活発な交流が出来るオープンな研究設備・施設です。加えて、高層棟の1～2階には最新のAV-ICT装置を完備した講堂を設置しています。

環境に配慮した先駆的な建物に与えられる国際的な評価・認証システムLEED-NCの最高位認証「プラチナ」及び国内評価CASBEEの最高位認証「Sランク」を申請中であり、ダブルで取得すると大学研究施設としては国内初となります。

また、本年3月に順天堂医院が臨床研究中核病院として承認されましたが、新研究棟内に国内外の研究開発中核拠点としての機能を担うオープンイノベーションプログラム「GAUDI」の活動拠点を開設し、順天堂の臨床プラットフォームを活用した開発シーズの社会実装に向けた取り組みを推進しています。

低層棟は、明治39年に第3代堂主・佐藤進が全面増改築した順天堂醫院の正面意匠（ファサード）を精緻に再現しました。真水英夫氏の設計による、理性とヒューマンイズムを象徴するルネサンス様式と伝統的な日本建築を融合させた建物で、壮麗で格調高く、「東洋一の病院」と評された順天堂の気概を世に示し、数多くの患者で賑わう“総合病院の雄”たる評価を確立しました。

医大協ニュース

岩手医科大学

《教授人事》

◎医学部外科学講座

新田浩幸

令和2年5月1日付

日本医科大学

《法人役員》

◎常務理事

弦間昭彦（再任）

令和2年10月1日付

《人事》

◎学長

弦間昭彦（再任）

◎医学部長

安武正弘（新任）

以上、令和2年10月1日付

◎大学院教授

本田一文（生体機能制御学分野）

令和2年7月1日付

酒井真志人（分子遺伝医学分野）

令和2年8月1日付

青柳陽一郎（リハビリテーション学分野）

令和2年10月1日付

◎特任教授

海原純子

令和2年6月1日付

松山琴音

Deshpande Gautam

南 砂

以上、令和2年10月1日付

◎成田国際空港クリニック所長

赤沼雅彦（再任）

◎ワクチン療法研究施設所長

廣田 薫（再任）

以上、令和2年4月1日付

《訃報》

庄山悦彦理事は、令和2年6月5日に逝去されました。享年84。

東邦大学

《教授人事》

◎教授就任

石田政弘（眼科学講座）

令和2年5月1日付

中村陽一（臨床腫瘍学講座）

令和2年7月1日付

東京医科大学

《就任》

◎主任教授

鈴木 亮（糖尿病・代謝・内分泌内科学分野）

原田和俊（皮膚科学分野）

清水聰一郎（高齢総合医学分野）

以上、令和2年4月1日付

◎教授

阿部光一郎（放射線医学分野）

濱田 宏（麻酔科学分野）

以上、令和2年5月1日付

沼部博直（小児科・思春期科学分野）

令和2年7月1日付

下田 貢（消化器外科学分野）

令和2年8月1日付

《退任》

◎主任教授

小田原雅人（糖尿病・代謝・内分泌・リウマチ・膠原病内科学分野）

坪井良治（皮膚科学分野）

羽生春夫（高齢総合医学分野）

以上、令和2年3月31日付

◎教授

葦沢龍人（東京医科大学病院医療保険室）

輪嶋善一郎（八王子医療センター外科関連分野麻酔科）

以上、令和2年3月31日付
 ◎臨床教授
 一和多俊男（八王子医療センター
 内科系分野呼吸器内科）
 令和2年3月31日付
 《名誉教授稱號授與》
 小田原雅人
 坪井良治
 羽生春夫
 徳植公一
 葦沢龍人
 以上、令和2年4月1日付

東京女子医科大学

《教授就任》
 若林秀隆（リハビリテーション
 科教授）
 令和2年6月2日付
 野原理子（衛生学公衆衛生学講
 座（公衆衛生学分野）教授）
 令和2年7月1日付
 市場晋吾（臨床工学科教授）
 令和2年10月1日付
 《教授退任》
 谷口敦夫（膠原病リウマチ内科
 教授）
 令和2年5月31日付
 林 和彦（東医療センター化学
 療法・緩和ケア内科）
 令和2年6月22日付

東京慈恵会医科大学

《人事異動》
 ◎常務理事
 山本裕康（就任／大学）
 令和2年9月1日付

◎教授
 田尻久雄（名誉教授）
 矢永勝彦（名誉教授）
 堀 誠治（特命教授）
 丸毛啓史（特命教授）
 斎藤 充（昇任／整形外科学講
 座）
 池上 徹（昇任／外科学講座）
 石川智久（昇任／内科学講座消
 化器・肝臓内科）
 穂苅厚史（昇任／内科学講座消
 化器・肝臓内科）
 倉田二郎（昇任／麻酔科学講座）
 上園保仁（就任／疼痛制御研究
 講座）
 齋藤裕美（昇任／総合医科学研
 究センター基盤研究施設）
 増岡秀一（昇任／内科学講座腫
 瘍・血液内科）
 西脇嘉一（昇任／内科学講座腫
 瘍・血液内科）
 太田有史（昇任／皮膚科学講座）
 辰野 聡（昇任／放射線医学講
 座）
 以上、令和2年4月1日付
 石橋由朗（昇任／教育センター）
 常喜達裕（昇任／内科学講座総
 合診療内科）
 以上、令和2年7月1日付
 萩原秀明（就任／連携大学院）
 令和2年8月1日付

昭和大学

《就任関係》
 ◎昭和大学名誉教授
 河村 満（授与）
 令和2年6月1日付
 田口 進（授与）
 令和2年6月9日付

《退任関係》
 ◎医学部臨床病理診断学講座
 （昭和大学藤が丘病院勤務）
 教授（員外）
 大池信之（退職）
 令和2年7月31日付
 《異動関係》
 ◎医学部内科学（糖尿病・代謝・
 内分泌内科学部門）（昭和大学
 病院勤務）教授
 山岸昌一（異動）（勤務地変更）
 令和2年7月1日付

順天堂大学

《人事異動》
 ◎教授就任
 南野 徹（医学研究科循環器内
 科学）
 令和2年7月1日付
 下 泰司（医学研究科神経学（練
 馬病院））
 須郷広之（医学研究科肝・胆・
 脾外科学（練馬病院））
 以上、令和2年8月1日付
 近藤聡英（医学研究科脳神経外
 科学）
 石島旨章（医学研究科整形外科・
 運動器医学）
 以上、令和2年10月1日付
 《訃報》
 市川銀一郎名誉教授（耳鼻咽喉
 科学）は令和2年5月3日に、
 平松啓一名誉教授（微生物学）
 は令和2年6月5日に逝去され
 ました。

関西医科大学

《人事》

- ◎新医学研究所（仮称）設置準備室室長就任
花岡宏史（新任）
令和2年7月1日付
- ◎教授就任
花岡宏史（研究所教授：新医学研究所（仮称）設置準備室）
令和2年7月1日付
堀井恵美子（理事長特命教授：附属病院整形外科（任期延長））
令和2年9月1日付
- ◎教授退任
上野博夫（教授：実験病理学講座）
令和2年8月31日付

大阪医科大学

《学校法人大阪医科薬科大学役員人事》

- ◎理事就任
大谷光昭
増田 豊
以上、令和2年6月1日付

《人事》

- ◎教授退任
石坂信和（内科学Ⅲ）
令和2年4月15日付
- ◎特別任命教員（教授）就任
日下裕介（麻酔科学）
令和2年5月1日付
- ◎特別職務担当教員（教授）就任
藤阪保仁（臨床研究センター）
令和2年8月1日付
高見俊宏（脳神経外科学）
令和2年9月1日付

久留米大学

《常務理事就任》

- ◎学校法人久留米大学常務理事
有馬彰博（再任）
令和2年6月28日付

《教授の就任》

- ◎医学部医学科感染医学講座（基礎感染医学部門）
小椋義俊
- ◎医学部医学科外科学講座
田山栄基
以上、令和2年6月1日付
- ◎医学部医学科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座
千年俊一
- ◎医学部附属病院メディカルセンター（循環器病センター）
田原宣広
以上、令和2年8月1日付

北里大学

《学校法人北里研究所第21期理事》（人事異動）

- ◎理事長就任
小林弘祐
- ◎学長就任
島袋香子
- ◎副学長・医学部長就任
浅利 靖
以上、令和2年7月1日付

聖マリアンナ医科大学

《教授任命》

- ◎救急医学病院教授（大学病院）
吉田 徹
令和2年6月1日付
- ◎内科学（脳神経内科）病院教授（大学病院）
秋山久尚
令和2年7月1日付

藤田医科大学

《教授の就任》

- 山下貴之（生理学Ⅱ）
- 加藤久幸（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学）
以上、令和2年5月1日付
- 伊藤弘康（臨床検査科）
令和2年6月1日付
- 橋本千樹（消化器内科学Ⅱ）
- 宮原良二（消化器内科学Ⅱ）
- 館 佳彦（消化器内科学）
- 松本省二（脳卒中科）
以上、令和2年7月1日付

《教授の退職》

- 松山晃文（再生医療学）
令和2年7月31日付

兵庫医科大学

《役員的人事》

- ◎理事
木内道祥（新任）
令和2年9月1日付
畑 守人（退任）
令和2年5月18日付

久留米大学

「高精度放射線治療・温熱治療が可能な放射線腫瘍センターを開設」

2018年10月1日、病院北館1階に、放射線腫瘍センターがリニューアルオープンしました。通常の放射線治療から定位放射線治療（SRS、SBRT）、強度変調放射線治療（IMRT）等の高精度放射線治療まで対応可能な Varian 社製リニアック装置「TrueBeam」、アキュレイ社製 IMRT 専用装置「TomotherapyRadixact X9」を新規導入しました。これらの放射線治療装置は、洗練された画像誘導により正確な位置へ高精度放射線治療を行うことができるため、患者さんにとって副作用が少なく治療効果が高いがん治療が可能です。特に「TomotherapyRadixact X9」は、高出力で最大135cmの治療範囲があるため、全身照射は勿論、広範囲のIMRTを短時間で正確に行える特徴があります。

また、高周波を用いて局所を直接加温する山本ビニター社製温熱療法装置「TermotronRF-8GR edition」を新規導入しました。この装置は、深在性腫瘍のみならず表在性腫瘍への温熱療法に対応します。各種化学療法や放射線治療などと併用することにより、局所治療効果が期待でき、QOLを重視したがん治療を行うことが可能になりました。多くの患者さんの治療に貢献しています。



TrueBeam



TomotherapyRadixact X9



TermotronRF-8GR edition

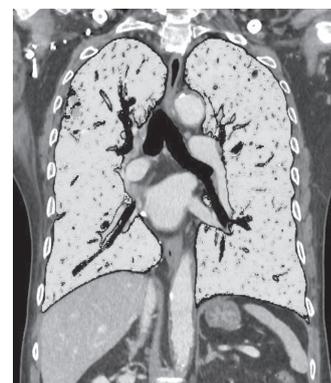
「国内初のクリニカルリサーチ CT システム Revolution Apex を導入」

2020年8月4日、GEヘルスケア社製「Revolution Apex」を国内1号機として導入し臨床使用を開始しました。「Revolution Apex」は、CT検査で得られる画像そのものの有用性を更に高め、画像診断における新たな分野を追及するために開発されたクリニカルリサーチCTシステムです。その特徴としては、ワイドカバレッジ（256列16cm）・高時間分解能（0.28秒/scan）・高空間分解能（0.23mm/pixel）・高精度 dual energy imaging（高速スイッチング方式）・高出力X線管球・最先端AIによる画像再構成など、様々な最新鋭テクノロジーを搭載し、これまで以上に患者さんの被曝線量を低減するとともに、分解能が高くノイズが少ない高画質なCT画像を臨床に提供しています。

「Revolution Apex」の導入により、特定機能病院として求められる診療・教育・研究が更に充実し、これからの画像診断の発展に大きく寄与することと期待しています。



Revolution Apex



Dual Energy Perfusion Image

《教授の人事》

◎主任教授就任

池田正孝（消化器外科学）

木村 卓（脳神経内科学）

以上、令和2年8月1日付

金澤伸雄（皮膚科学）

都築建三（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学）

以上、令和2年10月1日付

◎教授就任

狩谷伸享（麻酔科学・疼痛制御科学）

令和2年5月1日付

室井みや（心理学）

福田 昭（物理学）

藤原康宏（情報学）

古瀬明里（英語）

以上、令和2年10月1日

自治医科大学

《役員の異動》

◎理事

遠藤俊輔（就任）

令和2年5月29日付

《大学の人事》

◎事務局長

小池裕昭（退任）

令和2年7月18日付

的井宏樹（就任）

令和2年7月20日付

産業医科大学

《役員就任》

◎理事

吉田 剛（新任）

令和2年5月29日付

中川俊男（新任）

令和2年8月27日付

《人事》

◎教授

堀下貴文（麻酔科学）（新任）

令和2年6月1日付

金沢医科大学

《人事異動》

◎臨床教授

北方秀一（消化器内視鏡学）（就任）

令和2年7月1日付

愛知医科大学

《理事・監事の異動》

◎理事

宮良 肇（辞任）

令和2年5月31日付

磯部和男（就任）

令和2年6月1日付

◎監事

林 清博（再任）

令和2年5月30日付

《人事異動》

◎教授

早稲田勝久（昇任）（医学教育センター）

令和2年7月1日付

◎教授（特任）

齋木英資（採用）（パーキンソン病総合治療センター）

令和2年7月1日付

獨協医科大学

《教授の就任》

◎教授

中村隆俊（第一外科学）

令和2年5月1日付

清水泰生（内科学（呼吸器・アレルギー））

令和2年6月1日付

郷田憲一（大学病院消化器内視鏡センター）

令和2年8月1日付